

池谷和信著

『トナカイの大地、クジラの海の民族誌
ーツンドラに生きるロシアの先住民チュクチー』

東京、明石書店、2022 年、199 頁、3,800 円＋税

辻 貴志

TSUJI Takashi

アジア太平洋無形文化遺産研究センター

本書は、ロシア共和国の先住民チュクチが、現代世界の変化や国家の力に対して、どのように主体的な対応をしているか、主に生態人類学の立場から明らかにする。本書は、8 章から構成される。

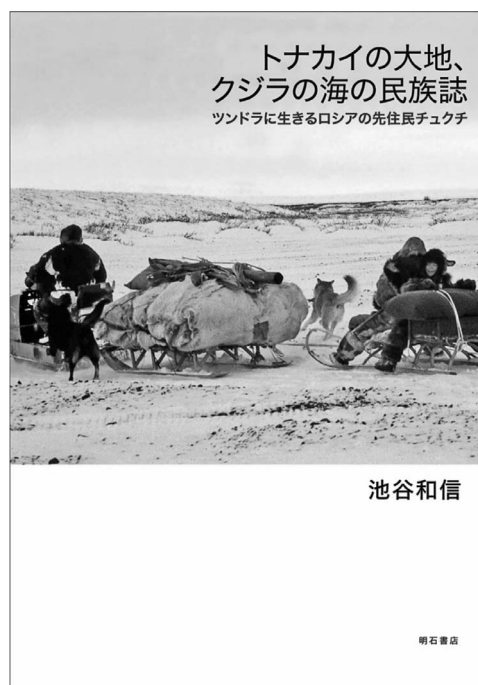
第1章「日本からロシアのツンドラへ」では、調査村での基礎調査の様子を明らかにする。特に、ロシアの社会主義下の統計資料の充実について、著者はこれまでのアフリカでの牧畜民調査との違いに驚嘆する。すなわち、トナカイを飼う遊牧民の土地である辺境にまで国家の関与が徹底して及んでいる様を強調する。

第2章「ツンドラの“陸の世界”ートナカイと人」では、チュクチによるトナカイの群れの管理技術及び、キャンプの構成と移動形態を詳細に分析する。その結果、トナカイの牧夫は国家の管理下で給与を得る、国営農場でトナカイを飼育して働く国家公務員であることを導き出

す。しかし、完全に国家に管理されているわけではなく、チュクチのトナカイ飼育には自然や社会に対する主体的対応が見て取れることを著者は差異化する。

第3章「トナカイの民のエスノヒストリーー世界最大規模の家畜飼育の変容」では、100 年前の資料を元に、キャンプとトナカイ飼育頭数の規模から、「トナカイチュクチ」と「海岸チュクチ」の地域性を復元する。その上で、チュクチの交易がトナカイ飼育及び狩猟とどのような関係にあったか推測する。さらに、古老に対する聞き取りにより、20 世紀初頭にチュクチが動物の毛皮を求めるアメリカ人と頻繁に交易していたことをエスノヒストリーの視座から明らかにする。

第4章「変わりつつあるトナカイの村」では、主に統計資料を典拠に、チュクチのトナカイ



飼育の年代と地域ごとの変化を追う。その結果、家畜トナカイは 1990 年以降、減少の一途を辿り、都市化がその要因の一つであると著者は考える。そして、トナカイ飼育の後にサケ漁業を生業とし社会変化に対応している様を示し、社会主義以前のチュクチの海洋資源利用が近代化したことを指摘する。同時に、先住民組織による土地権の復興運動も起きている状況に注目する。

第 5 章「ツンドラの“海の世界”―クジラと人」では、トナカイチュクチに対して海岸チュクチに着目し、ベーリング海での海獣狩猟の実態について、特にクジラやセイウチの狩猟に焦点を当て詳細に示す。海獣狩猟の光景に加え、これらの生物の肉を食料だけでなく、彼らに現金収入をもたらす毛皮用のキツネや労働力であるイヌの餌として分配する方法について明らかにする。この背景として、国際捕鯨委員会がクジラ肉の直接的な取り引きを禁止している政治性を指摘する。

第 6 章「変わりつつあるクジラの村」では、文献・統計資料を元にチュクチの海獣狩猟の変容について探る。中でも、国家の政策に連動する形で海獣狩猟が変化してきた過程を描き出す。加えて、グローバル化による変化を追跡し、国際捕鯨委員会によるクジラ捕獲頭数の制限がチュクチの狩猟集団を再編すると共に、社会主義体制崩壊後の新興実業家らの政治的野心に伴う社会変化によってチュクチの村の生活が急速に近代化し変容している事情を明らかにする。

第 7 章「陸と海を超えて―3 万年のホモ・サピエンス史、北方適応から極北適応」では、人類の北方での環境適応が、狩猟、採集、漁撈、牧畜の生業複合を基礎に、3 万年前から形成されてきたことを民族考古学的視座から考察する。そして、旧石器時代からロシア時代、さらに広くロシア地域を超えた枠組みからトナカイ飼育と海獣狩猟、そして資源管理に焦点を当て、北方・極北での人類の適応について議論する。チュクチの場合、内陸と海洋の資源利用の転換が容易であることがツンドラでの適応を可能にしたと著者は示唆する。

第 8 章「日本でのチュクチの紹介」では、日本でほとんど知られていないロシアの先住民の中でもチュクチについて、本研究の成果を踏まえ、著者が所属する国立民族学博物館での展示と映画の上映について紹介する。展示は、チュクチの牧畜と狩猟の文化を対象とする。映画は、トナカイの群れを管理する家族の 1 年を記録し、チュクチの伝統文化を描き出す。このように、一般の人々がチュクチについて知ることができる博物館での普及活動の事例を示す。

以上が、本書の大まかな内容である。著者は、アフリカのカラハリ砂漠の狩猟採集民を主な研究対象とし、ブラジル、バングラデシュ、タイ、日本を始め汎地球的な規模で調査研究を精力的に行ってきた。そして、文化人類学・地理学・考古学を下地に、地球環境史、環境人類学、生き物文化誌といった幅広い枠組みから調査研究を展開している。その上で、本書は、ロシア北方地域のツンドラの生態人類学的研究であり、政治生態学と歴史生態学、そして時空間の民族誌・地域研究・人類史的研究でもある。さらに、本書は、氷点下 30℃ にもなる極寒の世界に住む先住民チュクチの民族誌であり、ホモ・サピエンスの幅広い環境適応能力に着目した。著者は本書でチュクチを「トナカイチュクチ」と「海岸チュクチ」に分け、そこにロシアの国家体制を織り交ぜストーリーを構成した。読者は、このような著者の学術的関心と議論の複雑さを踏まえた上で、本書を読み解く必要がある。

本書は、チュクチの狩猟・採集・牧畜・漁撈が、ロシアの国家体制の枠組みの中で存続していることを、主にトナカイ飼育と海獣狩猟に焦点を当て、これらの生業の過去から現在を俯瞰する試みである。特に、チュクチの分布、人口、狩猟採集法、肉の分配、犬や橇やテントの利用といった狩猟採集民的な要素について具体的に記述した。今日の狩猟採集民は国家に取り込まれ、そ

の生業と社会文化の様式は大きく変容を遂げた。著者は変容前後の世界の狩猟採集民の比較から、狩猟採集に依拠した生活形態が社会変化によって容易に変容しうる二面性を本書で追求した。そのために、著者はフィールドでの参与観察に加え、文献・統計調査及び古老への聞き取りからチュクチのエスノヒストリーを描き出した。世界の狩猟採集民を追い続けてきた著者は、狩猟採集民の過去と現在、自然と国家の中での適応、そして地球上における狩猟採集民の未来をチュクチを事例に記録した。

現代、狩猟採集民の生活の記録は一刻を争う。加えて、筆者のチュクチの調査は、ロシアという国家が課す制約、日本との往来の不便さ、過酷なツンドラの気象条件、コミュニケーションを通訳に頼る限界を克服した骨の折れる作業である。ロシア政府への調査許可の取得と調査成果の還元も並大抵のことではない。このような困難と民族誌記述の釣り合いを取ることは極めて難しいことが本書の端々から窺える。

本書では、チュクチを「トナカイチュクチ」と「海岸チュクチ」に二分化し議論を展開し、遊牧の世界と狩猟・漁撈の世界を同時に探ろうとした点が著者の野心の現れである。著者は世界の牧畜民の研究でも高名であり、チュクチのトナカイ飼育に並々ならぬ関心を注いだ。特に、数世帯による数千頭というトナカイの群れの管理の仕方は、ツンドラでのホモ・サピエンスの適応において検証すべき課題である。その論理が、ロシアという国家に包摂されたチュクチの暮らしの中に現在も生き続けていることを著者は突き止めた。一方で、著者は海の世界についての研究をほとんど行ってこなかったが、海岸チュクチの海獣狩猟について事細かに描き出した。たとえ短期間の滞在であっても、海獣狩猟の要所を記録した点には頭が下がる。そして、トナカイ飼育からサケ漁業へと生業シフトしたチュクチ社会が、国際捕鯨委員会、NGO、政治家によるポリティカルな力学によって変容している反面、このような変化の中にチュクチが主体的な対応をしている側面を導き出した。

本書では、セイウチの牙の工芸品としての利用にも若干触れているが、これも著者の世界のビーズ細工研究と絡んでいると考えられる。調査時間の制約から、この点を十分に記述していない点、キツネの飼育、サケ漁業と一般的な漁撈、そして採集について詳しく取り上げていない点が、生業基盤を総合的に理解しようとする生態人類学としていささか物足りない。本点については、今後に続く調査課題であろうと注視したい。

著者はこれまで世界各地の狩猟採集民について記録・紹介してきたが、チュクチの調査は極北及び海の世界の狩猟採集を押さえる上で重要であったに違いない。狩猟採集で生きる人々を追いかけてきた著者のこだわりは、単に狩猟採集民をトータルに把握したいという学術的な欲求ではなく、狩猟採集民研究を生業としてきた著者の狩猟採集民に対する責務の現れである。

最後に、本書は記述に荒削りな面があるものの、その点を重厚で多面的なフィールドワークと理論構成で補い、日本国内で初めてチュクチの暮らしを報告した民族誌である。同時に、本書は著者の思考法やフィールドワークの仕方を随所に曝け出しており、高名なフィールドワーカーの調査研究の技法や試行錯誤を知る上で興味深い。本書は極北のツンドラに生きるチュクチの生業と社会文化変容、並びに変容に対する先住民の対応の姿をフィールドワークの結果に基づき克明に描き出しており、世界の先住民の暮らしの成り立ちと変化を知る上で大いに価値がある。読者は、チュクチというロシアに生きる先住民の存在だけでなく、人類や地域の未知の領域を開拓する民族学の知的醍醐味、そしてフィールドワークの面白さにも触れながら本書を読み進めることができるであろう。本書をきっかけに、チュクチへの理解が広まり、より体系的な調査研究が今

後展開されていくであろう。